

特発性心筋症に関する調査研究

研究要旨

本研究班は、1974年に旧厚生省特定疾患調査研究班として、特発性心筋症の疫学・病因・診断・治療を明らかにすべく設立され、その後約40年間継続して本領域での進歩・発展に大きく貢献してきた。本研究は、心筋症の実態を把握し、日本循環器学会、日本心不全学会と連携し診断基準や診療ガイドラインの確立をめざし、研究成果を広く診療へ普及し、医療水準の向上を図ることを目的とした。研究班による全国規模での心筋症のレジストリー、特定疾患登録システムの確立を推進準備し、心筋症をターゲットとした登録観察研究であるサブグループ研究を開始し、登録をすすめた。また、研究成果の社会への還元として、ホームページ公開や市民公開講座を行った

A. 研究目的

先行研究において、尿毒症毒素の一つであるインドキシル硫酸に着目し、心筋症との関係を調査したところ、拡張不全との関連が示唆された。今年度は、疾患や病態と、インドキシル硫酸との関係を明らかとすることを目的とする。

B. 研究方法

当院心臓血管内科心不全科部門に入院し心筋症・慢性心不全患者のデータファイルから、後ろ向きに心不全治療薬・腎不全治療薬の服薬情報と心エコー検査、BNP検査の結果を経時的に解析した。その中で、インドキシル硫酸除去薬であるAST-120投与群と非投与群における心収縮性・拡張機能の変化を検討した。

（倫理面への配慮）

院内倫理委員会にはかりその倫理的妥当性の承認をうけ、その範囲において観察研究を行った。

C. 研究結果

その結果、心筋症・慢性心不全患者において、AST-120投与は、心収縮性および拡張性の指標を改善させることを見いだした。

D. 考察

これまでの研究で、インドキシル硫酸は、腎毒性だけではなく、心筋などにも直接作用する可能性が報告されている。インドキシル硫酸は、その前駆体を除去する薬剤AST-120が既に販売されているため、かかる試みにより、肥大型心筋症/慢性心不全との関係、および今後インドキシル硫酸の除

去により、病態の改善が明らかになったことから、新たな治療法の確立も期待できる。前向き介入研究の実施が待たれるところである。

E. 結論

AST-120 が心不全治療薬になる可能性が示唆された。

F. 健康危険情報

後ろ向き観察研究のため、健康危険情報は無い。

G. 学会発表

1. 論文発表

Fukuda H, Shindo K, Sakamoto M, Ide T, Kinugawa S, Fukushima A, Tsutsui H, Ito S, Ishii A, Washio T and Kitakaze M. Elucidation of the strongest predictors of cardiovascular events in patients with heart failure. *EBioMedicine* 33:185-195, 2018

2. 学会発表

該当なし

H. 知的財産権の出願・登録状況（予定も含む）

1. 特許取得

報告事項なし

2. 実用新案登録

報告事項なし

3. その他

報告事項なし